

# 思考の経路

森孝一

第55回

山本篤子のファインアート・テキスタイル

山本篤子が刺繍に興味を持ったのは、母からの影響だという。現代構造研究所の三島彰氏の「神戸人間—山本篤子—」(『Gap Japan』第5巻第13号、株式会社ジャパン・プランニング・アソシエーション)を読むと「祖父は高級子供服を手掛け、祖父の姉はフランス人高官と結婚し、神戸で貿易商を営んだ。そうした環境の中で篤子さんは、子供の頃から舶来雑貨や洋書に

囲まれて育った。洋風の刺繍は、彼女の母が混血の従兄弟から学んだ技術の母子相伝、日本刺繍の勉強に加えて、幼い頃から東西刺繍に親しみ、洋画も趣味のお稽古事だった」と紹介している。



「Wish & Hopes 4」2013年 「Rendezvous Goldsmiths 1975-88」展 (Ruthin Craft Centre [ウェールズ]) 展示風景

アートとしての刺繍展開をしている先人を探す中、刺繍材料の輸入会社を経営する人の好意で輸入先の会社を訪問する旅に同行させてもらい、ドイツ、スイス、フランス、イギリスと回ったが、帰国の日が迫ってもアートのイステイックな刺繍には全く出合えなかった。帰国前夜、ロンドンのレストランで「ゴールドスミス・カレッジにある」と知りそこへ向かうことを決意するも、留学が果たしたのは2年後のことであった。山本は「私の留学時は大学院を創設するため、大学院申請をする正にその時だったので最高の教授陣と設備、環境で何しろ最高の教育でした。今でも語り継がれる最高のミラードビルディング校です。その学生だったことはステイタスです。英国人

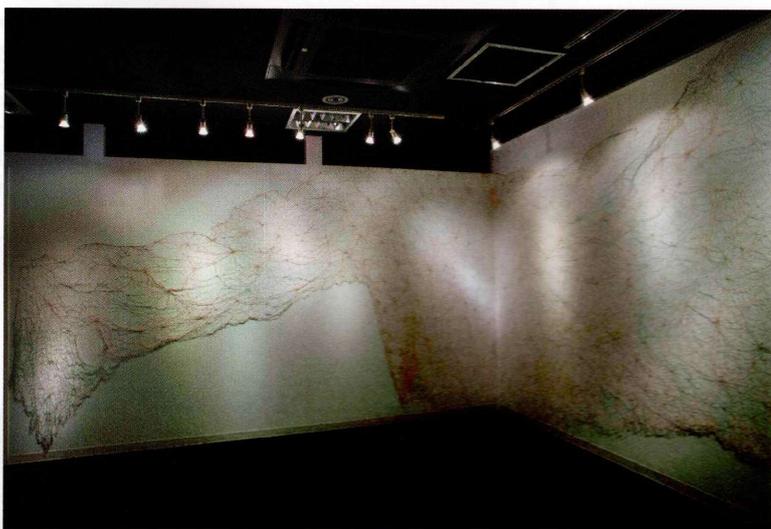
と話す時は、単にゴールドスミスの卒業と言わず、ミラードビルディングの学生だったと必ず言います」と語っている。ミラードビルディング校ゴールドスミス・カレッジでテキスタイル&エンプロイダリーを学んだ最初の日本人留学生が山本である。そこで、工芸的だった山本の刺繍はアート作品へと昇華した。そういう意味では、山本は間違いなく日本におけるテキスタイルアートの先駆者である。

山本は、日本でアートが育たない理由はこうしたアートスクールがないからだという。「建物の右半分がテキスタイル&エンプロイダリー、左半分がファインアート。ファインアートには、彫刻、絵画、版画、映像、写真、ガラス等、テキスタイル&エンプロイダリーには、シルクスクリーン、染め、織り、編み、ミシン等の部屋があり、設備は至れり尽くせり充実し、朝から夜遅くまで自由に使えた。テキスタイルの学生が、ヌードスケッチをしたければファインアートの方へ行けば良いし、



「わ 空気が見える」2018年  
「山本篤子の空気・市川航也の鶴」(美濃和紙の里会館) 展示風景  
写真: 山本雄祐

ファインアートの学生がシルクスクリーンを使いたければテキスタイルの方へ来る。彼らはテキスタイルの学生とは異なった発想でシルクスクリーンを使いこなす。例えばコーラージュした写真製版のシルクスクリーンに、直接タワシで傷つけて新しい表現方法を模索したりする。校内の購買部には、他学科の目新しい材料があり、小さな食堂には、ビターエール片手に熱い芸術論戦があった。当然の結果として、素材も技法も複合化した新しい作品が生まれる。彫刻やテキスタイル等の垣根が取り払われ、各々の表現のために自



「空気と穴 PIANISSIMO 4」2021年 完屋画廊での展示風景 写真：山本料



「Catch the wave of happiness」2014年  
「EBB&FLOW 引き潮と流れ展」(Grimsby Minster [イングランド]) 展示風景

由に素材や技法が使われ、バリアフリーなコラボレーション、これは正に20世紀後半の現代美術史そのままを体現した現場であった」と語っている。

三島氏は、山本のミシン刺繍を「刺繍の繻を捨てて刺に徹する彼女のステッチド・テキスタイルの技法は、大別して2種あるが、その典型的な表現は、刺す基布を捨てて、刺し糸だけで構成されるデザインである。これは基布にステッチした後、その基布を溶かして糸だけ残すのだが、英国では、アイロンを当てると炭化してしまうバニシング・モスリンを基布に使う。しか

しその繊維にアレルギーを起こす彼女は、温水で溶解する水溶性ビニロンを使う方法を生み出した。これはテープや布切れをサンドイッチしてステッチしたり、半溶解などのバリエーションもあり、彼女の特許になっている」(同上)と紹介している。

山本は、「発表する作品は、時間と空間を包括した瞑想空間です。画像や記録写真ではまったく知ること、感じる事ができない。展示会場に足を運んでのみ体感できる空間演出作品です。視覚ではなく心体で鑑賞する3D作品と言えます。作品制作の過

程で、透明な世界に迷い込んだようなトランス感覚の経験から、透明展を開し現在は、空気と穴という大きなタイトルのもとに、希望、音などの副タイトルをつけています。副タイトルには制作順に通し番号を付けていて、現在、瞑想は通し番号103になりました。『中心がいくつもあって、外周を持たない円』は、いくつもの中心がグルグルと円を描いて広く静かな瞑想の世界へと誘い、静謐な黙想自由世界が体感できる作品となっています」と説明する。

そして、1995年の阪神大震災によって作品は変わった。「多くの破壊と死を日のあたりにして、『生かされている』という思いが大きかった。精

神的にもまた、生活造形美という観点からも、私の中にバリアフリー化が生じ、色々なパーツに別れていた私は一つになっていった。『レクイエム・フォレスト16』は、私の商品であるスカーフによる瞑想空間作品である。一枚一枚はスカーフだが、作品全体を観た時はもはやスカーフではない。フォレスト16は私の内なる革命的作品となった」と語っている。アーツィストが作るものは、全てアートののである。以前は、スカーフ販売を屈辱と感じていたが、この時から山本の刺繍は、真の意味で工芸からアートに昇華した。現在、山本の作品はファインアート・テキスタイル世界を先駆けている。

やまもと・あつこ 兵庫県芦屋市生まれ。美術家。1980年ゴールドスミス・カレッジ ポストグラデュエートディプロマコース テキスタイル&エンプロイダリー修了(ロンドン)、アート&デザイン ディプロマ修得。武蔵野美術大学、昭和女子大学、神戸女子短期大学、成安造形短期大学などで非常勤講師。アートとしての作品制作に特化したユニークな教材方法で教育に携わる。

もり・こういち 1951年愛知県生まれ。美術評論家。東京国立近代美術館工芸館美術品購入等選考委員会委員、滋賀県立陶芸の森・陶芸館評議委員(2003~11年)、都留文科大学非常勤講師などを歴任。現在公益社団法人 日本陶磁協会常任理事、八王子市夢美術館の資料収集選定委員など。